

体育の授業の個別指導における授業改善

～個のつまずきに応じる指導内容と方法～

市之倉小学校 古川 稔彦

1 授業改善の視点

個のつまずきに応じる指導計画

2 具体的な実践

(1) つまずきを予想した個別指導

～4年生『プレルボール』より～

児童の数だけ生活体験の差、運動能力の差、運動への抵抗感の差がある。学ばせたい運動の特性を的確に捉えた上で、児童がどの場面でどのようにつまずくことが予想されるのか、そのつまずきをどのように克服させることができるのかを具体的に、意図的に指導計画に位置付ける必要がある。そして、児童にとって、適度な抵抗感がある活動を工夫する。(図表-1)

次のように児童の欲求やつまずきを予測・考慮して、指導計画を立てる。

児童の欲求・つまずき	欲求を考慮した指導計画(学習内容:運動)
プレルボールのゲーム(試合)をしたい。	・試しのミニゲームを行い、プレルボールを楽しむことができる。
相手のコートにボールを打ち返したい、ラリーが長くようにしたい。	・ボールを打つ時の力の入れ具合を変えたり、バウンドさせる位置を考えて打ったりすることができる。
ねらいたいところに打ち返せないから、ねらったところに打ち返せるようにしたい。	・ボールを打つ方向にへそを向け、その方向を向いて打つことができる。 ・ボールの落下点を予測して、素早く動き、打つことができる。
相手ととりぐいとこに打ちたい。	・チームで作戦を立て、どこに打つと相手は捕りにくいのかを考えることができる。
相手は予測できないようなアタックがしたい。	・チームでパスをつなぎ、トス・アタックを作戦を立てて実行することができる。

図表-1 指導計画

また、ボールを打つことへの個別支援を、次のような視点で行った。

- ・打つときの体の向き
- ・ボールをバウンドさせる位置(図表-2)
- ・ボールの落下点を予測した動き方
- ・動きを指示する声のかけ方



図表-2 ボールをバウンドさせる位置

(2) 相互援助活動をうながす指導

～6年生『頭はね跳び』より～

心理面、技能面から、次のような児童のつまずきを予測し、具体的な手だてを明確にして、指導計画を立案して、指導した。(図表-3)

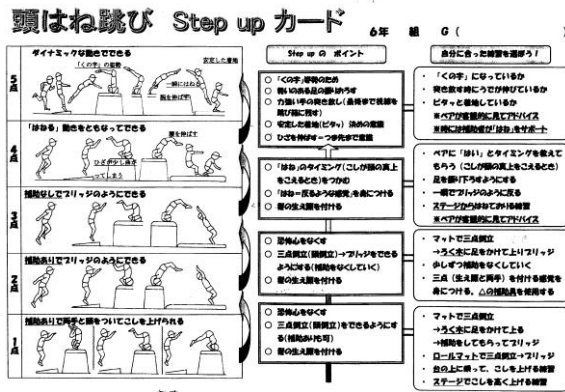
【気持ちの面】	
気持ちのつまずき	手立て
恐怖心・こわい 落ちたらけがをする	・インターネット画像を見る。(あんなふうになりたい) ・安心できる補助の仕方を身に付ける。(小柄な児童が補助する際は2人で行うなどの工夫)
【技能面】	
技能のつまずき	手立て
着手 頭がつかない	・助走のスピードの確認。ゆっくりと。 ・はえぎわをつくことを意識させる。ポートボール台を使い、視線のつく位置を確認させる。
助走 スピードがあまりすぎる。(助走距離をとりすぎる)	・2～3m程度の助走距離にする。 ・助走のスタート位置を壁にし、それ以上助走がとれないようにする。
踏み切り 強い踏み切りを意識しすぎる。一腰が上がらない	・ロイター板に「ドン」「バン」ではなく、「トン」と入るように音で伝える。
腰が上がらない	・ステージなどと同じ箱の高さに手をつき、腰を高く上げる練習をさせる。
空中姿勢 くの字姿勢ができない、ひざが曲がる。	・つま先を踏むように意識させる。 ・つま先を見るようにさせる。 ・足首を伸ばす意識をもたせる。
はね動作 はねが弱い。	・くの字姿勢で、「ぐっ」とためることを意識させる。そして一気に足を振り出すようにする。
はねるタイミングが悪い(早い)。	・膝が顔をこえたらはね動作に入るようにする。(仲間を声をかけさせる) ・くの字姿勢がしっかりできていれば、ひざが兎えたらはねる。
はねを大きくしたい	・目標物を決め、そこへ足を振り下ろすように意識させる。(体育館の窓など)
背中が反らない	・とび箱を見続けることを意識させる。 ・生え髪がついているかの確認。
突き放し 手のつき放しが弱い	・最後までとび箱を押すことを意識させる。 ・とび箱を見続けることを意識させる。

図表-3 指導計画

また、相互援助活動をより主体的にするために、次のような工夫をした。

① ステップアップカードの作成と活用

次のような「Step up カード」を作成して持たせ、児童自身がつまづきを感じたときや、中間の試技へのアドバイスをするポイントを明確にすることに活用した。(図表-4)



図表-4 ステップアップカード

② iPadの活用

中間の試技を動画として撮影し、試技後に再生して確認することができる。自分自身の試技が直後に、あるいは授業後においても繰り返し見ることができる。ストップモーションやコマ送り画像も可能となり、つまづきが分かりやすく、アドバイスもより適切になる。

③ 人形の活用

相互援助活動では、言語活動が中心となることが多い。しかし、自分の体を使って表現することも大切であると考えます。

また、この学習では「人形」を活用して、技能のつまづきやポイントを表現して伝え合うことも試みた。(図表-5)



図表-5

(3) ねらいを意識させるための工夫
～1年生『リレーあそび』より～

次のように「かけっこ」と「リレー」の2つの面からつまづきを予測して手だてを考え、指導計画を立案した。(図表-6)

	つまづき	手立て
かけっこ	まっすぐ走れない。 手足の動きが小さい、遅い。 最後に力をぬいてしまう。	目指すところに印を置いたり、コースの線を引いたりして、走るコースをはっきりさせる。 腕振り、もも上げを準備運動で練習。(着付式練習マニュアル) 「まだ走って」という声かけ。どこまで走るかをはっきりさせる。
リレー	バトンをスムーズに渡せない。 受け取れない。 折り返しコーンを大きく回ってしまう。 障害物走のやり方が分からない。	渡すときに「はい」という声かけ。受ける子の横を通り過ぎるときに速く練習をする。 手のひらをしっかりと開いて前に向けて手を出し、バトンを受け取る練習をする。 コーンの周りを小さく回る練習をする。 準備運動で、毎時練習をする。グループのみんで教え合う。

図表-6 指導計画

また、「コーンの周りを小さく回る」ことを意識させるために次の写真のようにコーンを中心に小さい円(青色)とやや大きめの円(赤色)をマークした。(図表-7)この円は、仲間が小さく回れていたかどうかの目安にもなり、相互援助活動にもつながると考えた。



図表-7 コーンと大小の円

3 実践を振り返って考えられること

一単位時間の学習を終えて、児童が「できるようになった。うれしい。」「仲間のアドバイスのおかげだ。」「仲間と一緒に活動することが楽しい。」と感じられる授業を目指したい。そのためには、運動の特性や個のつまづきを適切にとらえること、そして具体的な手だてとして明確にもつことは非常に大切である。

また、個に応じて繰り返しの学びができること、相互援助活動を促すこと、言語活動や表現活動の充実が図れること、などのよさがある。